

片澤光治良作品集

第十二卷



人間の運命 3

失われた人 結 婚

芹澤光治良

新潮社版

人間の運命 3

失われた人・結婚

〈芹澤光治良作品集12〉

昭和50年1月10日 印刷

定価 850 円

昭和50年1月15日 発行

著 者 芹 澤 光 治 良
発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式 新 潮 社

東 京 都 新 宿 区 矢 来 町 71
電 話 業 務 部 (03) 266-5111
編 集 部 (03) 266-5411
郵 便 番 号 162 振 替 東 京 4-808

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 新宿加藤製本株式会社

© Kojiro Serizawa 1975 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

失われた人
結婚

179 5

装
画
司
修

芹澤光治良作品集

第12卷

失われた人

へ人間の運命へ第五卷

第一章

九月一日の地震が、日本の社会を根こそぎ揺り動かし、ひいては次郎の運命を狂わすほどの大震災になろうとは、その日、次郎は思いもしなかった。

役所の三階から電車通りに転がるように逃げ出して、しゃがみこんでいたが、余震もおさまったようなので、役所へ引きかえそうとした。同室の田辺や林や若い雇員もいっしょだった。役所の裏門から十数人の人が出て来た。坂田が汗ばんだ額にふりかかる髪を掌でなで上げながら、笑顔で近づいた。

「森君。あぶないから、帰って言うんだ、守衛が。部屋はあのままにしておけば、いいそうだ。……余震かひどいと、煉瓦だから崩れるよ、……どこの部屋も引きあげたかな——」

「ぼくは鞆をとって来る——」

「鞆って、持ってるじゃないか……」

通勤用の赤革の折鞆を、次郎は持っていた。最初の震動で机の下に無意識にかくれて、その後、三階の部屋からあわてて逃げ出す時、どうしてそれをもったのであろうか。

電車通りで地べたにしゃがみこんだ時にも、気がつかなかった。

「あ、ぼくは鞆を忘れていた。大事な書類を入れてあるが……いいか、月曜日まで——」

そう、田辺は白麻の上衣についたどろを払いおとしながら、次郎や坂田といっしょに電車通りの方へ歩き出した。坂田は、大地震だったなあと、大きな声をあげて、道路の両側の傾きかけた家々を眺めながら歩いていたが、地震のあとでも渋谷の先のテニスコートへ行くつもりらしく、市電がとまっても、省線は大丈夫だから、有楽町で電車に乗ろうと、次郎と田辺を促した。

街には音響がたえて無気味なくらい静粛だ。人通りも少なく落着いていた。よく晴れていたから、次郎も田辺も予定どおりテニスに行くことにした。しかし省線もとまっていた。いつ開通するか見込みがたたないとの、駅員の話だ。次郎たちは顔を見あわせた。もうテニスどころではない気がして、すぐに三人とも歩き出していた。

次郎と坂田と田辺は「分室の三学士」と渾名されるほど、仲がよかった。もともと役所には、特に農務局には、法学士と農学士との間に暗黙の争闘があって、よんだん空気がたちこめていた。

法学士は役人として将来を保証されて、任官して何年目

にはどうなると、大体一生の進路が、はっきり階段のよう
にきまつていた。帝大を出て採用されるのは、その階段の
最下位につくのだが、とたんに階段の方がエスカレーター
のように動いてくれるので、じつと立ってさえいれば、三
年目には高等官六等、五年目には五等、四等、勅任官……
というように、健康である限り、自然に立身出世する仕組
であった。それに反して、農学士の方は、同じ帝大を出て
いながら、法学士のように便利なエスカレーターがないか
ら、自力で昇進しなければならぬが、一段々歩いての
ぼるようにおそいので、エスカレーターにのった法学士の
立身出世を、下から羨望して見上げることになった。それ
が、農学士には不愉快だが、これも制度の罪で、個人に責
任はないのだが……法学士の方はまた、同じ部屋でも、農
学士を敬遠し、無視して、個人的に親しもうとはしなかつ
た。こんなところから、法学士と農学士との間に、暗黙の
争闘が起きるのだが、立身出世を念願としない次郎は、人
間を法学士や農学士で区別しなかったし、坂田と田辺を一
年の先輩として親しんだ。幸いなことに、田辺は学者志望
であり、坂田は落着いて将来政治家になろうと、秘かに野望
を抱いていたから、次郎と馬があった。部屋の会議でも、
三人の意見がよく一致したが、昼食後の休憩や退庁時など
にも、おたがいに誘いあう有様で、部屋の若い雇員たちも、

ひそかに三学士と渾名してその友情を羨望していた。

そんなわけで、その折も、三人は有楽町から期せずして、
ともに足が渋谷の方へ向つていたのか、黙々と日比谷の十
字路をわたり、お濠端を半蔵門の方へ歩いて行った。

日比谷公園のなかから盛んに白煙がもくもくあがつてい
た。次郎たちも軌道をわたつて公園にはいつて見ようとし
た。地震で松本楼が失火したと、叫ぶようにして、公園から
走り出る学生があったが、火事場のような騒ぎもなかった。
「案外大きい地震だったかも知れんぞ」と、坂田は立ちど
まった。

「これから、ぼくの家へ行かんか」

坂田はその春故郷の島根で結婚した新妻の待つ、東中野
の家が、心配になった。

「東中野まで歩くのは、しんどいなあ。ぼくの下宿なんか
も、壁がおちて、本なんかちらばつてるかも知れんよ」

そう田辺が言った刹那、三人とも足払いをくつたように、
足がもつれて、その場にすくんだが、すぐにしゃがみこん
だ。大きな余震だった。大地にへばりつくようにして顔を見
あわせたが、血の気がひいていた。起き上ると、自然に
各自が家へ急いでいた。

次郎は青山六丁目に住む田辺といっしょに、馬場先門で
坂田に別れて、虎ノ門の方へ歩くことにした。麻布広尾町

へ帰るのに、市電の軌道を伝わる以外に方法がなかった。行く先、どこでも市電がとまり、瓦が落ち、傾いた家が多くて、通りに人々が出て不安そうに佇んでいた。

「ひどい地震だった、昼間でよかった。夜だったら、たいへんなことになったろうな」

そう田辺は吐息したが、通りに佇んでいた人々の表情にも、同じことをうかがえた。六本木にたどり着いた時、次郎はふと後方をふり向いて、息をのんだ。六本木がやや高い岡の上のようなのにも、初めて気がついたが、南の方から異様な雲が湧きあがり、晴れあがった空に、巨大にひろがろうとしていた。

「あの雲——」

「おかしい雲だね……三年前の夏、追分で見えた浅間山の火噴火を思い出させるな」と、田辺もしばらく眺めていた。

「あの時も、すみわたった空に、大きな花キヤベツのように噴煙が見えたが……もくもくと噴きあげて、すぐに花キヤベツがくずれて、空一面をおおったけれど……これは夕立雲かも知れんね」

それが、本所深川方面から、全東京を焼きつくす劫火の兆だとは、その時、次郎たちも気がつかなくて、すぐ材木町から霞町の方へ坂を下って、そこで、次郎は田辺と別れた。田部氏の家では、夫人が女中と家の横の巨大な檜の根も

とに、椅子をもち出して、ふるえていた。地震も大きかったが、ひっきりなしな余震が怖ろしくて、屋内にいられないと、言うのだった。次郎が帰って二時間ばかり後に、田部氏もどって来た。

京橋の第一事務所から、深川の第二事務所へ向う途中、兜町のそばで、電車が脱線して大地震だと知ったが、第二事務所へ行くのを断念して、第一事務所へ引返したところ、その、川にのぞんだ木造の古い二階屋が、瓦がおち、壁がくずれて、川へのめって、四人の所員が、書類などを外へもち出す傍で、ここに住みこんでいる松浦支配人夫婦が、埃まみれな顔で、呆然としていた。想像以上の大地震だと、田部氏はさと、金庫のなかのものを出してから、支配人夫婦にも避難をすすめた。支配人は第一事務所を死守すると言うし、一番若い社員の芝が田部氏に代って、第二事務所へ連絡に行くと言ってきかなかった。その夕、浜から曳船が二隻第二事務所にはいる予定であるが、主任の横田老がまだ出勤しないでくれればいいが——、田部氏は支配人夫婦や所員にも、無理をしないで、万一の場合は麻布の家へ避難するように注意を残して、歩いて帰った。そう告げてから、あわてて夫人に話した。

「そうだ、有田君の控家はどうか。お子さん達がいるんじゃないか。こわがっているだろう」

「婆やさんの話では、二、三日前に、節子さんが帰って来たそうですが」

「次郎、見て来てくれんか。節子さんは此処へつれて来た方が安心だろうからな」

正門から百メートルもはなれない斧町である。道路の反対側で、一寸はいつた小路の突きあたりに、二軒同じような門構えの小さな二階屋があるが、左側が有田氏の控家である。いつも閉じている木の門が開いていて、節子が外側に、木の門柱の根もとにしゃがんでいた。浴衣に赤い帯をおたいこに結んで、まるで少女に見えた。同型の隣家の門も開いていて、隣家の主婦であろう、若い女が五つばかりの男の子の頭を膝に抱えるようにして、節子に向きあつてうずくまっていた。大地震で外へ逃げ出したものの、余震で屋内へはいれない恐怖が、二人を近づけたが、おびえて口もきけない様子であった。

次郎は田部氏の家へ誘ったが、節子は婆やがもどるのを待たなければならぬと言った。

「婆やはどこへ行つたんですか」「買物です」「屋前に出て、まだ帰らないのですか」「いいえ、一時間ばかり前に出ました」「なにか地震で、損害でもありましたか」「いいえ、壁が少しおちただけですけど」——腰がぬけたようにしゃがんだまま、顔を上げて答える節子を、次郎は見おろし

ていた。隣家の婦人が言葉をはさんだ。

「ここなら、屋根瓦のおちる心配もなし、いざという場合には、成瀬さんのお庭へ一走り逃げればいいからって……お嬢さんと話していたところですよ」

次郎は婆やがもどったら、田部邸に避難するようにすめて、引きかえた。

節子が田部邸に来たのは、二、三時間後の、黄昏時であった。黒っぽい着物に着換えて、化粧もしていた。婆やが小さな風呂敷包と一枚の毛布をもって送って来た。彼女は買い集めた百目蠟燭を幾本かおいて、隣家の人々と家をまもるからと、あわただしくもどって行った。

その頃には、空にわきあがっていた白雲が、夕焼雲のような色をして空をおおい、東京中が焼けているという噂をまいて、屋敷の下の市電の線路を、避難民の群れが、天現寺橋の方へ通りはじめた。

田部邸へも、避難者が次々に現われた。第一事務所の社員が駆けこむようにして来て、事務所が四時近くに類焼したと、しゃくり上げた。消防も防火する人もなく、どこでも焼け放題だったと、報告した。支配人夫婦と、事務所の最後を見届けて、いっしょに避難したが、途中で煙や混雑にまぎれて見失ったと、支配人夫婦の安否を心配して、通った街々の模様を、喋りたてた。

余震がするので、危険で、サロン前の石畳式のポーチに椅子を出して、そこにみな集まった。停電しているのに、拘らず東京の焼けるほてりで紅く明るかったが、ぐうぐうと地軸からでも響くように、微かだが腹にしみる音がつづくなかに、時々爆破でもするような音響がまじって、不安で委せているというが、次郎は落着いていられなかった。全東京が焼けるというのに、どうしたらいいか——駆けるようにして、材木町から六本木へ出てみようとしたが、火に追われて黙々と避難する人々の波に、逆らうことができなかった。近所の人々も、みな家をすて、道路端にかたまつて、ふるえていた。

「次郎、外へ出ないで、ここで落着いて、どんなことになるか、待たんか」

見かねて、田部氏が声をかけた。この地震は東京だけであるか、横浜はどうか、箱根の向う側、沼津はどうか、沼津の別荘には隠居が滞在しているがと、田部氏は焼けおちる銀座付近の多くの貸家や京橋と深川の事務所のことを思うとともに、横浜の事務所や横浜と東京間を往復する十数隻の曳船がどうであらうかと、仕事のこと、仕事にたずさわる人々のことを案しながら、不安で、次郎を目のどくところにおきたかった。

そこへ、支配人夫婦がめいめい風呂敷包を両手にさげて、精根つきた恰好で転がりこんだ。夫人は石畳の上に崩れるように坐るなり、水を下さいと喘いだ。水をおるようにしてから、あわてて髪を手でなおしはじめたが、涙がよごれた顔に糸を引いて流れ、一言も口をきかなかった。支配人は田部氏の差出したウィスキーの盃を、一気に口にあげるなり、

「すみませんでした。芝君を深川の事務所へやって……死なせにやったようなものでした」と、頭をたれて、むせびあげるのをこらえた。

皆、しんとして、瞬間、^{ぐわ}うる言葉もでなかったが、横にいた節子がお亡くなりになってよかったですわね」

「有島先生はお亡くなりになってよかったですわね」

「どうしてですか」

「だって、こんな地震にあわないで、すんだんですもの——」

ああ、そうか、と次郎は自分に睥いた。この場合、有島先生のことを突然言われて、はじめて節子の存在を認識したように、目のさめる思いで、節子を見たが、ちがった返事を予期したのだ。しかし、そう答えたのも、正午からの体験が、恐怖をともなつて、どんなに激しく心をいためたかと、同情した。

「森さん、東京は、これから、生地獄のようになるのでは
ありませんかしら——」

大きな瞳で、じっと次郎の顔を見上げていた。

「どうして、そんな不吉な想像をするんです」

「母から濃尾地震のことを聞いていますから……少女
の時だったそうですが、岐阜ですけれど、やはり街が全部
焼けて……あとで、食べる物がなくて、みんな餓鬼のよう
になって、大変だったんですって……母の家も焼けて、米
倉だけ三つのこったけれど、米倉を開けて施してしまわな
ければ、どんなことがおきるか、危険な気配があつたんで
すって……母の父は、米倉を開いて、気前よく全部施米し
たそうで、そのために、母の家はつぶれることになりまし
たけれど……今では、岐阜公園に、祖父の顕彰碑が建つて
いますが、母は生地獄だったと、よく濃尾地震のことを話
すと、申します。地震も火事もこわかつたけれど、それ以
上に、おびえた人間がこわくなつたって……だから、これ
からが心配ですわ」

「だって、今は文明も進んだから——そんな心配はいりま
せん」

その時、田部氏が支配人に何か話したので、次郎も節子
も囁きをやめた。田部氏は支配人を励ますのか、節子の婆
やの話をしていた。

「——まだ余震のあるうちに、すぐ出入りの店へ行つて、
白米や味噌醬油や乾物や蠟燭など買い集めたと言うんだよ。
小さい時に濃尾地震にあつた体験で、すぐそう頭が働いた
って、夕方蠟燭を持つて来てくれて、事もなげに話してい
たが……それでこの家でも、すぐ出入りの店へやつたそう
だが、その時には、もうどこでも、売り惜しんで、なにも
売ってくれなかつたんだよ。この地震と火災——災害はい
つまでつづき、どこまで拡がるか、わからんけれど、なあ
松浦君、今は力を落していなくて、じっくりなんでも身に
受けて体験しておけばいいんだよ。その体験がいつか、き
っと、智慧や本能を動かす力になって、助けることがある
からな」

支配人もその細君も聞いているのか、いないのか、虚脱
状態で、肩を下げていたが、支配人は大きくうなづくよう
にして、

「これで、なにもかも、おしまいです。東京中が火の海に
なつて、焼けおちています……火に追われて逃げながら、
日本人が贅沢になつたので、天罰だなんて、言つてた人が
あつたが、ほんとうにそうかも知れません。もうおしまい
です。残念だが海洋商会だつて……第一事務所は焼けたし、
あそこからずっと川向うまで、見る限り一面火の海で、あ
の勢いでは、曳船も残つてはいないでしょう。深川の事務

所のみんなは、無事に逃げおおせたか……浜の事務所だつて、どうですかね。ほんとうに海洋商会もおしまいです」と、自分に言い聞かせてでもするように、呟いた。

「うん、海洋商会の終りかも知れんが、終りなら終りで、立派に終りにするように、落着いて、ゆっくり考えようじゃないか。なあ松浦君、元氣を出すんだよ。東京が焼けたからといって、日本は終りにはなるまい。焼けたあとには、復興事業が起きて、海洋商会も仕事がふえるだろうじゃないか」

「さようですわ。この人ったら、世の終りのように言いますが……三味線をもつて逃げ出したところ、途中で、そんなもの、すてろつて、大変な剣幕で……。東京中が焼けくずれて、東京も、海洋商会も、おしまいになったあと、三味線をひける日なんか、あるもんかって……人ごみのなかで煙にまかれて、それは、荷厄介でしたけれど、あれをすてるくらいなら、わたしは、いのちをすてた方がいいと思うのに、とうとう、すてさせられてしまいました。でも、東京は焼けても、きつと復興しますわね。海洋商会だって……わたし、この人はなんと言つても、撥^{はた}だけはすてまいと思つて、大事に持つていて、それでも、よかつたですわ」

常盤津^{とまわづ}の名取りだという支配人の細君は、ようやく落着

いたのか、そう言葉をはさんだが、支配人はきりつとした顔を細君に向けて、

「今日の地震が東京だけだとは思えんからな。どうせ富士火山脈の地震だろうから、意外に大きいんだよ……あしたになつてみる、どんな災害だかわかつて、みんな胆をつぶすことになるかも知れんからなあ」と、吐息した。

真赤な空の反映で、支配人や細君の顔が赤く光つたが、ふと次郎はこの屋敷が火にとりまかれていゝるような錯覚におそわれて、立ち上つた。見て来ますと、言うなり、門の外へ出た。

翌日からが大変であつた。想像のできない大事件がおそつた。一睡もできないで夜があけたが、空一面に火煙の余韻のせいか、よどんで、無気味な色の太陽が出て、いつまでも褐色な光がさしていた。

次郎は自分の視力が衰えたのかと、疑つて、井戸端で、幾度も清水で目を洗つた。もう火事はおわつたか、まだ燃えつづけているのか、遠くに何か爆発するような音が時々するが、皆目わからない。どことどこが焼けたか、災害の状況もわからない。屋敷のうらの崖下の市電の軌道を、前夜から、ひっきりなしに、天現寺橋の方へ黙々と逃れる人

人が、きけば、地獄に化した街の様子を告げるが、どこまでが真実か、新聞も号外も出ないし、東京が機能を失って知りようがないから、いつそう不安になった。

松浦さんが若い所員と深川の事務所の様子を探りに出ようと、話しているので、次郎もいっしょに出掛けて、役所へ行こうと、身支度した。その時、前の家から伝達があった。朝鮮人の襲撃にそなえて、自警団を組織するから、男子はすぐ成瀬邸の前に集合せよというのだ。田部家を代表して、次郎が行ってみることにした。

隣の船成金の大邸宅の鉄の大門が大きく開いて、門前に縁台がいくつもおいてあったが、ふだん見かける商人などが、物々しい恰好をして控えていた。鳶職かと、次郎はあやしんだが、この人々は前夜から、火の用心のために集まって、町内の警戒にあたっていたが、その朝、警察の命令で、自警団に改組したと、言うことだった。勤人らしい人々が集まると、町会長であるう、年かきの人が声を張りあげた。「みなさん、きのうの大地震につづいて大火災で、日本は内乱状態です。今朝戒厳令がしかれて、自分たちの町内は自分たちの手で、まもらなければならなくなりました。各町内とも、町内の男子で自警団をつくって、警備にあたれという命令です。朝鮮人がこの混乱に乗じて、井戸に毒を投じたり、各地に襲撃をしています。みなさんもそのつも

りで、武器のある者は、万一の時のために、それをもって集まって、町内をまもって下さい。それから、この町内もいつ火災にあうかも知れないから、各戸、柳行李一個だけ用意して、もち出せる場所において下さい。火災になったら、自警団が責任をもって、成瀬さんのお庭へ運んで保護します。このお庭なら、どんな大火になっても安全ですから、町内のみなさん全員、ここへ避難することにして下さい。但し、その場合、荷物は一切持たないこと。わかりましたね、さし当り、朝鮮人の襲撃にそなえて下さい」

みな吞みこむようにして聞いていた。初めて聞くニュースに、次郎も胸をあつくしたが、前日組閣のできなかった山本内閣が、果して戒厳令を発令したのか、朝鮮人がほんとうに襲撃したのか、どこからその知らせがあったのか、疑問をもった。同じ疑問をいだいたらしく、四十過ぎの眼鏡をかけた紳士が、町会長に質問した。

「戒厳令や朝鮮人のことを、どうして知りました」

「警官が知らせて来ましたよ。交番には、警視庁の白動車が来て、指令して行ったそうです。疑う者は、坂の上の交番へ行つて、たしかめて下さい」

そう、町会長が素気なく答えるそばで、在郷軍人の服装の男が加えた。

「朝鮮人はゆうべ、葛飾や千住の先など、数カ所襲撃した